

## 自立主体の発見

——古代キリスト教の遺産——

ハンス ユーゲン・マルクス

古代キリスト論の発展は二つの段階に分けることができる。第一段階ではイエス・キリストと神の関係が論じられ、381年ローマ帝国新首都コンスタンティノポリスで開催された第2回エキュメニカル（世界）公会議で終了した。同会議が採択した教理によれば、神は唯一である一方、「父と子と聖霊」（マタ 28：19 参照）の三位一体であり、それゆえイエス・キリストのうちに受肉した神の子は父なる神と同質である。このようにキリストと神の関係が明らかになると、今度はキリスト自身における神的なもの与人間的なもの、ないしは、神性と人性との関係が問題になった。451年にカルケドン公会議は神性及び人性のどちらかへの偏重に歯止めをかけるため、キリストにおいて神的本性と人間的本性が混合せず、分割せず、結合されている、という旨の教理を宣言した（以下カルケドン信条<sup>1)</sup>。80年後ビザンティオンのレオンティオスが指摘したように、カルケドン公会議は二つの相反する見解の調停を試みたが、概念構成が十分整備されていなかったので中心的な問題を自ら解決できなかった。ネストリオスの名前と結びついているアンティオキア派は、人と神の区別を重視するあまり、二つの本性を担う主体の一致を危うくし、一方、キュリロスを仰ぐアレクサンドリア派は、主体の一致を力説するあまり、人と神との区別を危うくする。問題の核心は両性の区別を尊重しつつ、その担い手の一致をどう説明できるかということであった<sup>2)</sup>。新たな概念構成を巡るレオンティオス等の努力で、現在私たちが自立主体とみなす「個」としての人間の尊厳が発見され、普遍重視の時代が終わった<sup>3)</sup>。しかしキリスト教世界の一致といった観

点から言えば、そのための代価は高かった。まず論争の経過で、東西キリスト教の断絶分離へと導いた相互不信の種が蒔かれたし、論争の結果、いわゆるネストリオス派教会（正式名称：古代東方教会）と単性論派教会（正式名称：東方正統教会）がカルケドン信条支持の流れを汲むキリスト教主流から離れてしまった。

## 1. カルケドン公会議の挑戦

そもそもカルケドン公会議はローマ教皇レオ1世の要請に応じて開催されたもので、以前、レオ1世からコンスタンティノポリス総主教<sup>4)</sup>フラヴィアーノスに送られた教理的書簡（以下レオ教書）も議事録に収められており、カルケドン信条にもかなりその内容が織り込まれている<sup>5)</sup>。そういうわけで、西方においてカルケドン信条はすぐにも歓迎され、かつ、その後常に正統信仰の試金石とみなされた。しかし当時の問題意識から判断するかぎり、東方においてそう簡単に受け入れられるはずもなかった。他方、カルケドン公会議によって採択された規程28条は、西方教会における教皇首位権を再確認する一方、はじめてコンスタンティノポリス総主教に東方教会における同様の首位権を認める<sup>6)</sup>。しかしそれは古来ローマに次ぐ第二位とみなされてきたアレクサンドリア総主教関係者が一層の疎外感を抱くはずだという理由で、レオは承認を拒否した<sup>7)</sup>。アレクサンドリアの反応に関するこの予告は的中した。これに触れる前に概念構成の面でカルケドン信条がはらむ問題を指摘しておこう。

### 1.1. 概念構成

アレクサンドリア派はエフェズス公会議(431年)を主催したキュリロス<sup>8)</sup>を、アンティオキア派はコンスタンティノポリス公会議(381年)に参加したモブスエスティアのテオドロスを各々最高権威と仰いでいた。前者の後任ディオスコロスの主催で開かれた教会会議(449年)における後者の思想

とその思想の唱導者の不当な排斥を受けて、教皇レオは皇帝に新たな審議を要請し、これがカルケドン公会議開催のきっかけとなった。その席でキュロスのテオドレトスはアンティオキア派のキリスト論を弁明し、自分自身と大家の正統性を公認させることに成功した。一方、ディオスコロスは排斥された。

こうした経緯を背景に採択された教理は神的本性と人間的本性の区別とともに、両性の結合をも力説するが、その結合の仕方を説明していない。また両性の担い手を指すのに、アレクサンドリア派の中心概念であったヒュポスタシスとアンティオキア派の用いたプロソポンを併記することによって、後の思想展開につながる重要な示唆をしているが、当時の概念構成の枠内ではアンティオキア派と同様、両性の結合よりはその区別を重視する印象を与える。またレオ教書の中で、各本性に固有の働きが強調されていることを考えれば、終始一貫して三位一体の第二位たるロゴス（ヨハ1：1-18）をキリストの主体と捉えたキュロスの用語が採択されたものの、その根本的な関心事は無視されたとアレクサンドリア派が未曾有の敗北感を味わったのは想像に難くない<sup>8)</sup>。

最大の問題は用語のあいまいさであった<sup>9)</sup>。ラテン語のペルソナと同様、ギリシャ語のプロソポンは日常用語として「顔」から「個人」までの広い意味で用いられていた。したがって、二つの本性が一つのプロソポンのうちに現れるという発想はアンティオキア派にのみならずラテン教父にも通用した<sup>10)</sup>。ところが一つのヒュポスタシスが二つの本性を担うという、もう一步進んだ発想にアレクサンドリア派は容易についていけなかった。カパドキア教父のおかげで、当時の神学的用語ヒュポスタシスは強度の現実性をもつ活動主体という意味で通用していたが、その対応概念である本性(γίφισις)は従来どおり具体的事物の本質形相、すなわち、あるものを別の種に属するものと異にする一方、同じ種のものに共有される形相と理解され、ひいては人間の場合、誕生以来のあらゆる生命活動の始源という意味で通用していた。したがって本性とヒュポスタシスの併記は、共通性と特殊性

の対応関係を表示し、一方は他方なしに存在しないことを示す。だからキュリロスにはヒュポスタシスと本性を区別することを拒否したし、その攻撃に追いこまれてネストリオスもついに二つの本性が二つのプロソポンのうちに現れることの承認を余儀なくされ<sup>11)</sup>、そのためエフェゾス公会議で異端排斥の宣告を受けた。要するに、ヒュポスタシスであれプロソポンであれ、そう呼ばれる「個」が普遍の特殊例であるというギリシャ古典・古代の発想をキュリロスとネストリオスは共有していた。

アンティオキア派がついにネストリオスとの縁を切ったところで、キュリロスはその指導者と和解し、以降二つの本性の区別を認めた。しかしヒュポスタシスなしの本性は存在しないから、受肉以前の論理上の区別しかなく、受肉以降はまさしく一つのヒュポスタシスと同様一つの本性しかない、と相変わらず力説した<sup>12)</sup>。カルケドン公会議後キュリロスの追随者はその見解を弁明したため、アポリナリス、エウテュケースと同様単性論派のレッテルを貼られた。しかし本来の単性論派とは対照的に、神と人の「融合」(ギ *mixis*) を否定し、キュリロスやカルケドン信条と同様に「結合」(ギ *henosis*)、さらにキュリロスにならって両性の「総合」(ギ *synthesis*) を主張したのだから、理性的靈魂に生かされるキリストの人間の本性を十分承認していた。

不幸にも適切な概念構成の整備はカルケドン公会議後数10年を待たねばならなかった。その間カルケドン派も単性論派もキュリロスの著作から各々の見解に有利な箇所を抜粋し、解釈を巡って論争を交わした。最初のキュリロス詞華集は482年頃アレクサンドリアに現れた。編集者は数名のカルケドン派修道士であった<sup>13)</sup>。ヌビアに生まれ、アレクサンドリアで修道者となったネファリオスは同詞華集に説得されて強烈なカルケドン派に身を翻し、500年、自らもキュリロスの詞華集を著した<sup>14)</sup>。またパレスチナの修道士を正統信仰へ戻すためその地に赴いた。その攻勢のためギリシャ生まれの修道士セヴェロスをはじめ10数名の修道士は首都に逃れた。

宮廷でパレスチナ修道士の代表を務める間(508-511年)にセヴェロスは

ナフファリオスへの反論や主著『真理の友』<sup>15)</sup>を著したため、反カルケドン陣営の指揮者とみなされるようになった。題はキュリロスを指し、その著作から多数の箇所をただ寄せ集めるだけでなく、これをもとに体系的なキリスト論を展開するところが本書のすぐれた特徴である。

キュリロスの路線に沿ってセヴェロスは「受肉したロゴスの一本性」を主張する。人間としてキリストはロゴスの受肉とともに実存し始めたのだから、ロゴスから独立した人間的本性を想定することは無意味である。他方、キリストは普通の身体と霊魂、さらには各々の諸特性をもつ人間として生まれ育ち、罪以外（ヘブ4：15参照）人間のすべての営みをなし、またこうむる。しかもそのすべての主体はロゴスに他ならない。

すでに首都滞在中ハリカルナスの司教ユリアーノスは以上のキリスト論を批判したようだが、ついにエウテュケース以上に素朴で極端な単性論を繰り広げ、キリストの身体が母の胎に宿る時点から不滅であったとまでも主張してセヴェロスの猛烈な反論を受けた。そのため単性論派は二つに分かれてしまった。これについて詳細を述べる暇がないので<sup>16)</sup>、ただ二点だけを指摘しておきたい。1) セヴェロスは極めて説得的に「まことの人」を弁明する一方、終始一貫して「まことの神」をいっそう重視した。2) 当時の概念構成の枠内でどちらかへの偏重を避けるのは容易なことではなかった。話をカルケドン公会議後の出来事に戻そう。

## 1.2. 帝国の安定

ディオスコロスの扱いに対する不満から、まずパレスチナで著名な修道士の中に批判の声上がり、カルケドン信条作成にも関わったエルサレム総主教ユヴェナリオスが一時追放されるほどの反対運動に発展した。皇帝マルキアーンノス(450-457年在位)の圧力でユヴェナリオスが復帰し、以来パレスチナの教会はカルケドン信条支持体制を敷いた。

しかしエジプトではついに帝国離反の兆しも現れるほど情勢は深刻さを増す一方だった。451年11月穏健なプロテリオスが後任となったが、修道

士、庶民の大半はひそかに対立総主教に叙階されたティモテオス・アイルロスを支持し、457年3月28日に起きた暴動の際プロテリオスは殺害された。皇帝レオ(457-474在位)が命じた意見調査の結果、ティモテオスの叙階を無効とする各地司教間の合意が判明して以来、本人は亡命先からカルケドン信条反対の文筆活動を展開した。そうした中で、軍の力でアレクサンドリア総主教座を司るティモテオス2世はじめ、カルケドン支持者たちは、地元の信徒や修道士からメリキタイ(皇帝派)と罵倒されるようになった。もちろん帝政はエジプト情勢を放置することはできなかった。広大で肥沃な土地からの農産物を確保することは、特にアフリカ州が失われてからは死活問題であったし、商業も一番栄えていたエジプト州からの税収も気にかかるものであった。他方、中央に対する周辺地域では古代エジプト文明、文化交流、学芸の中心地への誇りも加わって、恨みは深まる一方であった。

エジプトほどではなかったが、同様に食料供給地として経済的に搾取されていたシリアでも中央への不満が高まっていた。公会議後20年間のアンティオキア歴代総主教はカルケドン信条を支持したが、471年、総主教マルトゥリオスの留守中に修道士たちの応援で「フェルト屋」とも呼ばれた司祭ペトロスが総主教座に上げられた。次の皇帝となるイサウリ人の首領で、当時シリアにおける帝国軍司令官を務めるゼノンも異変に関わっていた<sup>17)</sup>。もともとペトロスはコンスタンティノポリス近郊にあるエイレナイオン修道院に属しており、そこでフェルトを作る仕事をしていたので「フェルト屋」と呼ばれた。アコイメタイ(正統信仰のために眠らない)派と称される同修道院の修道士は厳格なカルケドン信条支持者で、ペトロスは単性論を唱えたため追放されていた。総主教座に就くや、修道士の要請に応じて聖歌トリスハギオンに手を加え、「聖なる神、聖にして力あり、聖にして不死」という伝統的せりふに「われらのため十字架にかけられた」という語句を追加した<sup>18)</sup>。これはあまりにも露骨な単性論宣言と受け止められて、就任7・8ヶ月でペトロスは失脚し、沈黙厳守の約束でもとの修道院

に迎えられた。アンティオキア総主教座はしばらくカルケドン信条を支持したが、シリア内陸部はこの時から単性論派の拠点となった。

もとよりアンティオキアはギリシャ植民都市として誕生・発展してきた。当てもギリシャ系の官僚や商人が多く、人口の大半を占めていたが、内陸に住む原住民はシリア語を話し、砂漠地帯周辺に群がっていた修道士の指導を仰いでいた。彼らは救いを求めてこの世との絆を断ち切り、苦行、瞑想に専念して、いっさいの人間的な事柄を克服しようと努めていた。こうした修道士の志はキリストのように神と一致し、まさしく神化されるということであった。したがって、キリストがあまり人間的であっては困る。こうした心情が、単性論が特にシリアとエジプト砂漠地帯周辺に群がっていた修道士の間で絶大な人気を博し、その影響で庶民にもひろまった最大の理由であったろう<sup>19)</sup>。

474年ゼノンが帝位に就いた頃、帝国本土は東ゴート人の侵略に脅かされていたが、帝政の巧みな政策で、狙いはイタリアに向けられた。476年、東ゴート人首領オドアケルは西帝ロムルスを廃位し、東帝承認を得ないまま「皇帝の臣下」としてイタリアを司った<sup>20)</sup>。こうした大変動の最中、ゼノンの義兄弟バシレイオスは一時帝位を奪い、人気取りを狙って、直ちにレオ教書とカルケドン信条を弾劾する回勅を出し<sup>21)</sup>、ティモテオス・アイルロスとフェルト屋パウロスの復帰を許した。しかし首都世論の圧力で同回勅は撤回され、476年、ゼノンが帝位に戻ると、パウロスは流罪に処せられ、ティモテオスは処分を受ける前に亡くなった。後任に選ばれたのは、そのよき友のペトロス・モーゴス（吃音者の意）であった。彼が地下に潜行して司牧に励む中、帝政から呼び戻されたティモテオス2世は公式にアレクサンドリア総主教を務めた。数年後、その依頼で修道士ヨハネス・タライアは上京して、現職の死後、カルケドン派エジプト人を後任に選ぶことを提案した。自らは被選挙権を断念すると元老院の前で誓うことを条件に、皇帝は賛同したが、482年2月、ことが起きたときにはヨハネスが総主教に選ばれた。いよいよアレクサンドリア総主教座人事問題を解決すべく、コ

ンスタンティノポリス総主教アカキオスは皇帝名の勅令<sup>22)</sup>を草案し、ペトロス・モーゴスはこれに署名した後、彼をアレクサンドリア総主教と認めた。後に統一令（ヘノーティコン）という名で知られるようになった文書はニカイア公会議からエフェソス公会議までの教理を再確認する一方、レオ教書とカルケドン信条を黙殺するものである。レオ教書とカルケドン信条が弾劾されていないという理由で、エジプトの修道士をはじめ多くの反カルケドン派は統一令に反対したが、東方4総主教座を互いに和解させることには成功した。ところがローマの反応は厳しかった。問題視されたのは統一令の内容自体ではなく、アカキオスがローマの首位権を無視してアレクサンドリア総主教座の人事に干渉したということだけであった<sup>23)</sup>。つまり、ローマはその時点でなおもカルケドン公会議規程第28条を納得していなかった。484年、教皇フェリクス3世がアカキオスを破門したこと<sup>24)</sup>で、東西両教会間に最初の分裂が起こり、歴代教皇が相手の譲歩を繰り返し無視したため、分裂は半世紀も続いた。

ゼノンの後を継いだアナスタシオスの治世(491-518年在位)で統一令は東方4総主教座内にも一致を保証し得ぬことが次第に判明した。主な理由はセヴェロスに加えてマップク（ギヒエラポリス）の司教フィロクセノスを指導者と仰ぐ単性論派が公然と展開した反カルケドンの活動であった。エデッサ神学校で教鞭をとって以来、後者はモプスエスティアのテオドロスとキュロスのテオドレトスといった旧アンティオキア派大家に加えて、彼らと同様カルケドン公会議の席で正統と承認されたイバスへの攻撃を繰り広げた。その際、イバスがテオドロスの正統性を弁明するためペルシャ主教マリに送った書簡が特に問題にされた。なぜなら、同書簡はカルケドン公会議の席上で読み上げられ、正統資料として議事録に付帯されていたからである。フィロクセノスの活動で従来の統一令解釈を保持したアンティオキア総主教フラヴィアーノスは窮地に陥り、509年の教会会議で単性論に傾く新解釈に同意せざるを得なくなった。前述したように、その年以降セヴェロスは首都に滞在し、その影響で511年、親カルケドン派の



マケドニオスが首都総主教座から追放され、また正確に時点は分からないが、皇帝名でレオ教書とカルケドン信条を弾劾する文書も著わされた<sup>25)</sup>。翌年フラヴィアーノスもついに失脚し、セヴェロスが後任に選ばれた。こうしてエルサレム以外の東方総主教座はすべて単性論派の手に渡った。実際、かつてセヴェロスを保護し得なかったエルサレム総主教エリアもその計らいで516年に失脚した。後任に選ばれたヨハネスはセヴェロスに譲歩しようとしたが、修道士の反発を受け、主要修道院長サバスとテオドシオスを左右に付けられ、ネストリオスとエウテケースに加えてセヴェロス自身をも弾劾することを強いられた<sup>26)</sup>。

アコイメタイ派を中心に首都でも反対の声が高まり、宮廷内部にさえ同調者が増えた。512年11月、単性論派修道士の行列が、またも「われらのために十字架につけられた」と追加されたトリスハギオンを合唱しながら行進したとき、暴動が起きた。皇帝の速やかにして賢明な対応で首都の情勢は収まったが、今度はトラキアでゴート人連合軍司令官ヴィタリアヌスが反対運動に加担し、反乱を起こした。514年、帝国正規軍が大敗を喫すると、皇帝は翌年4月1日の予定で、教皇参列公会議の開催を約束した。教皇ホルミスダスは合同信仰告白の草案を準備したが、東ゴート人王テオドリクとの調停のためか、コンスタンティノポリスへの返事を遅らせた。結局、公会議が開催されなかったことで、ヴィタリアヌスは再度首都を攻撃したが、今度は大敗を喫し、公会議の構想も消えた。

88歳の長寿を全うし真夜中に亡くなったアナスタシオスは、国庫にかつてないほどの予備資金を残したが、子孫がなかったらうに後継者の指名もしていなかった<sup>27)</sup>。遺体発見後数時間の混乱が続いたあげく、帝国軍司令部は仲間の一人であるユスティヌスを帝位にあげた。当時まだローマ教皇管轄下にあったトラキア州の生まれで、久しぶりにラテン語を母語とする新帝のもと、帝政は再び西方に目を向け、ヴィタリアヌスが親衛軍司令官に登用されたことも方向転換の表れであった。

戴冠式後間もなく、アコイメタイ派の率いる大衆は総主教座聖堂にただ

れ込み、主日典礼に集っていた総主教ヨハネス2世と常設司教会議議員にカルケドン信条の公認とセヴェロスの弾劾を強制し、皇帝もこの措置を追認した。結局、セヴェロスはアレクサンドリアに逃れ、その地で前述したユリアーノスとの論争が勃発して、単性論派がついに二つに分かれてしまった。コンスタンティノポリスとローマの間で使節や書簡が交わされる中、カルケドン公会議記念祭日が導入された(518年7月16日)。交渉は以前ホルミスダスが用意した合同信仰告白の受理およびアカキオスはじめ歴代総主教の弾劾宣言で完成した(519年3月28日)。ゼノンとアナスタシオスさえこうした前代未聞の運命から逃れることはできなかった、というのはなほだきわどい前例ができてしまった<sup>28)</sup>。

カルケドン派とローマ教皇座の一方的な勝利が教会と帝国社会の恒常的な安定を保障するはずもなかった。これを一刻も早く見ぬいたのは、農家出身で読み書きもできない叔父の皇帝を補佐していたユスティニアヌスであった。新帝政誕生直後、ヴィタリアヌスはかなりの発言権をもっており、宮廷がまったく無抵抗のままローマ側の要求をのんだのもそのためであったろう。彼を抑えるべく、皇帝はユスティニアヌスともう一人の甥ゲルマヌスを親衛軍共同司令官に任命した。後者がバルカン半島でスラブ人の侵入を一時的に歯止めをかけることに成功すると、甥たちの人気が一気に上がり、520年の夏、ユスティニアヌスは非難されることなくヴィタリアヌス殺害の手配ができた。翌年、執政官を務めるユスティニアヌスは、緑の党と青い党による華麗な競技大会の後援をするうち、自らが応援していた青い党の演技者テオドラに恋をして、叔父の在位中は彼女と同棲していたが、527年、自ら帝位に就くや正式に妻として迎えた。テオドラはエジプトでも踊り子として活躍した遍歴がありその地域の情勢にも精通していたことに加えて、単性論派聖職者から親切に扱われた思い出を大切にしていた。548年没するまで、当然、夫に対してそれなりの進言ができる立場にあった。

## 2. 総決算への歩み

遅くとも帝位に就いた時以来、ユスティニアヌスは大きな夢を抱いていた。そしてついかなりの程度まで実現させた。その夢とは、野蛮族に征服されたイタリア、北アフリカ等を奪回し、単独皇帝のもとに旧ローマ帝国を復興しようというものであった。さっそく法律の整備や行政・財政の改革に取り組んだのも、夢の実現に向けての内政条件を整えるためであった。かといって西方ばかりに目を向けているわけにはいかなかった。エジプト、シリア情勢は依然不安材料であったし、新帝政のもとで課せられた税は一層重圧的で、不満の声は高まる一方であった。そういうわけで単性論派との調停を図ることが急務となった。これに貢献した神学の流れは20世紀50年代以降、新カルケドン主義と呼ばれる<sup>29)</sup>。

### 2.1. 新カルケドン主義の貢献

新カルケドン主義はカルケドン信条を掲げる一方、キュリロスのキリスト論をその解釈の中心に据える。ユスティニアヌスも自ら代表的著作を著すほど、その調停の試みに絶大な期待を寄せた<sup>30)</sup>。はじめてその試みを彼に知らせたのは、518年の終わり、あるいは翌年のはじめ頃、おそらく同郷ヴィタリアヌスの発議で、黒海とドナウ川下流で隔てられた地域から上京してきたゴート人修道士代表団であった。現在、ドブルジャの地名で知られている同地域は古代スキタイ人の本土であったため、同代表団は資料の中ではスキタイ修道士と称されている。上京の主要目的は教皇使節に『信仰書』を手渡し、それについての教皇承認を得ることであった<sup>31)</sup>。だが、使節にはその内容が赤裸々な単性論と映り、受理が拒否された<sup>32)</sup>。

カルケドン信条を「ネストリオス主義」という批判から守るため、スキタイ修道士は5項目の承認を求めた。1)「一本性」は「二本性」の誤解を防ぐための各々が他に対して矯正機能をはたすこと。2)キリストが「二本性から」綜合されている方、また「二本性において」結合されている方

のどちらの表現も適切であること。3) マリアが「真にして本来の神の母」であること。4) 「三位一体の一つが受難した」こと。5) キリストにおける二本性の綜合について語ることが正統であること<sup>33)</sup>。特に第3, 4項目はアコイメタイ派修道士の憤りを招き、ヴィタリアヌスもスキタイ修道士を保護し得なくなって、推薦状を持たせてローマに送った<sup>34)</sup>。ホルミスダスはいちおう代表団と会見したが、ユスティニアヌスからも数回推薦状が届いており、ますます強く承認を進言するものであったにもかかわらず、ホルミスダスはいっさい公式見解を表明しなかった<sup>35)</sup>。ユスティニアヌスが分けても第4項を重視したのは、これに教皇承認を得るなら、アコイメタイ派を抑え、単性論派に歩み寄るために利用できると思論んでいたからに他ならない。実際、単性論派は「われらのために十字架につられた」というトリスハギオン追加をまさに自説の標語として掲げてきたので、三位一体の一つが「受肉した」と同様に「受難した」ということは、三位一体論の枠内でまったく正統であり、単性論派との調停を図るうえでそれなりの役割が期待できた。あの非妥協的なホルミスダスさえ、スキタイ修道士案を承認こそしなかったものの排斥もしなかったのは、ユスティニアヌスにとっては少なからぬ戦略的前進であったに違いない。

ユスティニアヌスに影響があったかは分からないが、パレスチナそしてシリアの一部から早くもスキタイ修道士案を支持する声が上がった<sup>36)</sup>。その頃カイサレイアのヨハネス(グラマティコス)はセヴェロスの文筆活動に reacting、『カルケドン公会議の弁明』を著し、その中で三位一体論とキリスト論の各中心概念を橋渡しとして、三位一体論で一つといわれている本質(ousia)とキリスト論で二つといわれている本性(physis)の異同を論じ、またカルケドン信条を掲げる神学者としてははじめて、三位一体第二位たるロゴスがキリストの実存主体であることを明確に表明した<sup>37)</sup>。

カパドキア三教父は三位一体における本質とヒュポスタジスの区別を説明するため、前者を「共通のもの」、後者を「特殊固有のもの」と定義した。すなわち、父・子・聖霊各位に「特殊固有のもの」は、生むこと・生まれ

ること・発出することであるのに対して、神であることはまさしく「共通のもの」である。ところで、人間一般の場合には、本性と呼ばれるものはただ「共通のもの」に尽きるわけではなく、誕生以来、各個人のあらゆる生命活動の始源である。これがキリストの場合には、カルケドン信条のいうとおり、神的であると同時に人間的であるが、神的本性から独立した人間的本性について語ることはできない。セヴェロスがもとより「一つの本性」を主張し、またカルケドン派に歩み寄って「二つの本性」からの総合を容認しているのも、まさに本性を誕生以来の生命活動の始源と理解しているからである。ヨハネスはこの理解に同調して、キリストの場合にはやっかいな問題をはらむ本性の概念をいちおうは棚上げにして、代わりに「二つの本質」と「一つのヒュポスタジス」について語ることを提案する。

各個人の場合には、本質は本性とヒュポスタジスの中間にあるもの、すなわち、まさしく他の諸個人と同様に人間であることに他ならない。そして、各個人を他の諸個人と異にする「特殊固有のもの」はその人をかけがえないヒュポスタジスとならしめる。その一回限りの現実性を強調するため、ヨハネスはよくエンヒュポスタジスという概念を用いる。これは次の世代に重要な意味を帯びてくるのだが、ヨハネス自身の理解では、他のヒュポスタジス「のうちに」実在するという意味ではない。

キリストが神と同じ本質のうちに自存すると同時に、私たちと同じ本質のうちに自存する。受肉の秘儀を否定するつもりがないなら、セヴェロスもこのことを認めなければならない。他方、キリストに「特殊固有のもの」はすべてまさにロゴスに「特殊固有のもの」である。そういう意味において、キリストの人間の本質もしくは本性が、ロゴスのそれに加えてもう一つの純粹人間的ヒュポスタジスに担われているわけではない。まさしく、ロゴスが肉となった（ヨハ 1：14）ことは、こう理解されるべきである。

「神の子であることは、ロゴスに本性上固有である。また、人間であることも、他のものではなく、まさしくロゴスに固有である。これはエ

ンヒュポスタジス（位格）的結合のためにそうである。なぜなら、他のもののうちにではなく、まさしくロゴスのうちに自己自身の肉が実存するからである。……もちろん、その肉は人間的本質に共通のもの、すなわち靈魂に生かされる肉であることを有する。しかし神たるロゴスにおいてのみ、その本質は特殊固有のもの、すなわち、他のものの肉でないことを有する。こうした肉は「ロゴスとかけ離れて」自己自身において実存しないのだから、どうして「自己自身の」ヒュポスタジスを有することができようか。」<sup>38)</sup>

新カルケドン主義を古典的な形に仕上げた二人の神学者はともにレオンティオスという名で知られる。どちらもパレスチナの修道士で、6世紀3・40年代に帝国首都で開かれた種々の宗教会議にも参加しているが、便宜上、一人はビザンツの、もう一人はエルサレムのレオンティオスと呼ばれる<sup>39)</sup>。

ビザンツのレオンティオスもカイサレイアのヨハネスと同様、誠実な態度でセヴェロスとの対話を求め、反発にあった時にも、なお丁寧にセヴェロスへの答弁に務めた<sup>40)</sup>。問題の核心は、セヴェロスの重視するキリストの一致とカルケドン信条が力説する区別との間における均衡をどう理解するかという問いに、双方が十分納得できる回答を提供することである。そのため、できるだけ広い視野、まさに存在論的視野に立って論究を進めることが大事である。

およそ存在するものは、普遍的共通性によって互いに結びついており、また各々に固有の特殊性によって分かれている。こうした一致と区別を特定するものは二つある。あるものは種によって一致しているが、ヒュポスタジスによって区別されている。他のものは種によって区別されているがヒュポスタジスによって一致している<sup>41)</sup>。

そのように、キリストを含めてすべての人間は種によって一致しており、各々かけがえのないヒュポスタジスであることによって区別されている。

ヒュポスタジスどうしの違いは「数字」上の違いではあるが、キリストにおける神なる「種」と、人なる「種」の違いは、断じて数的違いではない。各個人における靈魂と肉体という二つの「種」の違いに類似するものである。したがって数字を挙げるときには、何をどの観点から数えるかをきちんと押さえておかなければならない。「数字自体はものを結ぶことも分けることもしない。実際、数字は自己固有の自存性を有することもない。」<sup>42)</sup>

このように「二つの本性」、各々自らヒュポスタジスを伴うはずだ、という古典・古代ギリシャ的発想を退けることは、著者レオンティオスにとって最大の関心事であった。どのように人間の本性がキリストのヒュポスタジスのうちに実存するかの説明はあまり詳らかでない。ものどうしの一致、区別の諸関係に言及する文脈で、それらを超えてヒュポスタジスはまさしく「自己自身として実存するもの」であると定義する<sup>43)</sup>。本性もしくは本質の概念はもっぱらものの「完全性」を表示するのに対し、「ヒュポスタジス」という語は端的に……自立存在するものを表示する」と力説する<sup>44)</sup>。だからヒュポスタジスと本性の各諸特性も明確に区別されるべきである。「複数のヒュポスタジスに固有の諸特性は、それらを互いに異なる個別存在とするが、……本性に属する諸特性は、あるものを他のものとは異なる個別存在とせしめない。ヒュポスタジスに固有の諸特性だけが単一存在を作る。」<sup>45)</sup>

そういうわけで、キリストにおいて各本性に固有の諸特性は当然に異なるのだが、そのヒュポスタジスにおいて交用する。たとえば、神であることは全知全能などの特性を伴うが、それはヒュポスタジスについても言える。逆に、誕生、成長、苦しみなど、人間であることに伴う諸特性もまたヒュポスタジスについて言える。

ところが、カイサレイアのヨハネスとは対照的に、ビザンツのレオンティオスは三位一体の第二位たるロゴスがキリストのヒュポスタジスだとは、どこでも言っていない。他方、「ヒュポスタジスなしの本性は存在しない」という前提に立って、神的本性と人間的本性のどちらも「それ自身においては認識され得ない、他のもののうちに存在をもつ」と明言する<sup>46)</sup>。それが

ロゴスでなければ一体何なのだろうか。オリゲネスが神と被造界の中間に位置付けたヌースもしくはキリストの先在的靈魂と答える説もあるが<sup>47)</sup>、正確には分らない。

もう一人のレオンティオスは、数年後、おそらく536年と543・4年の間に、直接ネストリオス派と単性論派を相手取る著作を著わし、その中で、ビザンツのレオンティオスが残した問題にも取り組む<sup>48)</sup>。三位一体の第二位たるロゴスがキリストの神的本性と人間的本性を担う基体ないしは主体である、というのがレオンティオスの根本命題である。その基体を表示するのに、カルケドン信条と同様、アレクサンドリア派のヒュポスタジスとアンティオキア派のプロソポンを同義語として活用する。そう称されている基体なしには人間的本性が存在しないことを認める一方、「二つの本性」がただ一つの基体に担われていることを説明するため、エンヒュポスタスという形容詞を活用する。一般にこの形容詞はヒュポスタジスの内に実在する付帯的ならざるものを表示する。レオンティオスはこれをキリストの神的本性と人間的本性のいずれにも適用する。前者がロゴスの内に実在するように、後者もけっしてロゴスとは別のヒュポスタジスを持たず、受肉以来もっばらロゴスの内に実在する。これは従来の本性に似通っているように見えるが、レオンティオスの用法では、本性一般やその諸特性だけではなく、それらの個別的展開をも表示する。キリストの人間的本性がはじめてロゴスの受肉によってそのような自己展開を開始するのだから、それは最初の瞬間からロゴスの働きである一方、まったく人間的な自己実現でもある。そういった意味において、受肉以前には単純なヒュポスタジスであったロゴスは受肉の結果「総合されたヒュポスタジス」<sup>49)</sup>になった。

「今やロゴスのヒュポスタジスが特定されているのは、以前のように父から生まれることと、聖霊でないことの特性によってだけでなく、複数の本性や種々の本性、人格上の諸特性から成り立つものであることによる。……そういうわけで、父と聖霊に共通であるロゴスの本性について、



また、父と聖霊、さらには聖なる乙女から生まれなかったものの肉に関わるものを共有しつつも、すべての人間に対するロゴスのヒュポスタジスの特殊性についても正しい知識をもつことは大事である。聖なる乙女から生まれたこの肉は、本性上私たちとアダムの子らすべてに共通である。しかし子の肉はヒュポスタジスを私たちと、また父と聖霊とは別のロゴスだけに共通の仕方では有するのである。」<sup>50)</sup>

こうしたロゴスと肉との綜合ないし結合は、各々の諸特性の交用をもたらす。これによって新たなヒュポスタジスも本性も出来上がってこないことを説明するため、レオンティオスはつぎの例を好んで引き合いに出す。

「炉の中に差し入れられ、火によって灼熱した鉄は別の本性もヒュポスタジスも示さない。鉄のヒュポスタジスと燃える火は同じ働きをする。それ自体としてヒュポスタジスでない火の本性は鉄の本性とともに一つのヒュポスタジスになることによって、鉄の本性と結合された。」<sup>51)</sup>

レオンティオスの影響で、ヒュポスタジスはキリスト論の文脈で基体ないしは主体という意味で用いられるようになった。それが三位一体の第二位たるロゴスに他ならないから、神的本性と人間的本性の結合は「位格的結合」と呼ばれるようになった。他ならぬユスティニアヌス自身が「神たるロゴス、すなわち聖なる三位一体が……乙女から己自身のために理性的、知性的靈魂に生かされる肉を創造した」<sup>52)</sup>と、一番明確かつ簡潔な説明を残した。このことは「ロゴスが他の〔人間の〕ヒュポスタジスないしプロソポンにではなく、人間的本性と結合されていることを意味する」。<sup>53)</sup> そういうわけで、まさしく「三位一体の一つが受難した」<sup>54)</sup>とも言える。実際、「両性から綜合された私たちの主イエス・キリスト、神のひとり子は受肉の後にも三位一体の一つなのである」。<sup>55)</sup>

## 2.2. ユスティニアヌス帝の宗教政策

すでに法令集第1巻に収められている信仰告白は、ユスティニアヌス自身「治世当初より奉じてきた」信仰箇条の一つとして「三位一体の一つが受難した」というスキタイ修道士案第4項をあげている<sup>56)</sup>。実際、教皇による同項目の承認を取り付けるのが、帝位に就いてからの政策課題の一つであった。

法令集第1巻が完成した529年、クリミヤ半島は帝国に合併され、翌年、ドナウ川に沿う国境が固められ、またペルシャ軍も久しぶりに決定的な敗北を喫した。ペルシャでは王位交代後の531年、両国間で平和条約が結ばれ、いよいよ西方に目を向ける余裕が生まれた<sup>57)</sup>。533年の夏、帝国軍最有力司令官ベリサリオスは約1万8千の兵を伴ってカルタゴに到着、数ヶ月の戦いでアフリカを再び帝国属州とした。2年後に始まったイタリア奪回は15年もかかったが、すでに536年、ベリサリオスはローマに入城していた。こうした大変動の最中、ユスティニアヌスは統一信仰のもとに全帝国をまとめようという、もう一つの政策課題に取り組んだ。

セヴェロスとユリアーノスの仲違いで単性論派が分裂したことを受けて、ユスティニアヌスは532年にセヴェロス流単性論派の代表を首都に招き、翌年信仰令を出した。カルケドン信条のキーワードを避けながらも、その根本思想に矛盾することもなくキリスト論の要を説き明かした<sup>58)</sup>。また、同年夏2名の司教をローマに派遣し、彼らに携えさせた書簡で教皇ヨハネス2世にスキタイ修道士案第3、4項の承認と、アコイメタイ派の排斥を要請した<sup>59)</sup>。同派からもローマにやって来た代表の振る舞いは危惧を招き、自らの説得にも応じなかったことを理由に、ヨハネス2世は同派の改心を期限にその排斥を認める旨の返答をした<sup>60)</sup>。また、コンスタンティノポリス元老院に宛てた書簡で、スキタイ修道士案第3、4項の正統性を承認したが、レオ教書はじめ従来の教理を再確認した<sup>61)</sup>。

そこで、いよいよセヴェロス自身とアレクサンドリア総主教ティモテオス4世も首都へ召されたが、後者が急死したため、後任テオドシオスはセ

ヴェロスに数ヶ月遅れて535年初夏に到着した。その頃、現職コンスタンティノポリス総主教も亡くなった。皇后の計らいで後任に選ばれたアンティモスはまたもカルケドン信条を棚上げにすべく調停を巡って、セヴェロスとテオシオスとの交渉に臨んだ。カルケドン派の危惧が深まる中、イタリアで東ゴート人王テオダハドを取り巻く情勢が急速に危うくなり、和平のため教皇アガペトゥス1世自身がコンスタンティノポリスに派遣された。536年3月、到着の時点でテオダハドは身内の陰謀ですでに故人となっていたし、ベリサリオスの奪回戦略も着実に進んでいた。しかもアンティオキア総主教エフラエムは、以前から首都情勢への干渉を教皇に要請していたこともあって、アガペトゥス1世は到着後直ちにアンティモスを解任し、後任メナスを自ら叙階した。もちろんユスティニアヌスはそれらの措置を承認していたし、新総主教とともにホルミスダスの信仰告白を含む声明に署名した<sup>62)</sup>。

教会会議の準備中に教皇が急死したため、同会議はメナスの主催で開催され(536年5月2日-6月4日)、レオ教書、カルケドン信条の再確認と、単性論派の新たな排斥で閉幕。数日後ユスティニアヌスは同派弾圧を命ずる法令を公布した<sup>63)</sup>。全司教座は新政策支持者に占有され、アレクサンドリア総主教に選ばれたパウロスは武力も惜しまず、その推進に全力を傾けたのでついに皇帝の命令で解任された。後任にはより穏健なゾイロスが選ばれた。ユスティニアヌスは速やかな解決でアレクサンドリア情勢が収まったと誤解し、この機会に新総主教と「改心した」当地の修道士に宛てた神学論文で、流罪先で亡くなった(538年2月8日)セヴェロスへの反論を展開した<sup>64)</sup>。しかし、その時点で新たな問題が起きた<sup>65)</sup>。

540年初頭のパウロスの件の調査が、ガザで委員会が開かれるきっかけとなった。エルサレム近郊の新ラオラ修道院から40名の修道士が追放され、調査委員の一人で、教皇使節ベラギウスにも彼らの諸説をまとめる文書が送られた。追放の身となった修道士は、同委員会に参加していた首都司祭エウセビオスの支持を得、その干渉で彼らの主要反対者6名も新ラウ

ラ修道院から追放された。後者の訴えはアンティオキアで開かれた教会会議で審議され、オリゲネス主義の弾劾が決議された。これを受けて、親オリゲネス修道士がエルサレム総主教ペトロスを責める中、対立が一層深刻となり、後者は各修道院長に問題とされていたオリゲネス主義の諸説を文書にまとめさせ、これを自分の報告書とともに宮廷に送り、ユスティニアヌスの裁定を求めた。ペラギウスもしかるべき措置を進言したことを受けて、ユスティニアヌスは543年1月、オリゲネス弾劾勅令の公布に踏み切った<sup>66)</sup>。

その数週間前、ユスティニアヌスは441年以来帝国各地を荒らした腺ペストからやっと回復したのだが、2年近く病床に就いていた間、帝政は皇后が動かした<sup>67)</sup>。シリア周辺砂漠地帯を治めていたハリトが司教の派遣を依頼したことを受けて、皇后の宮廷にこもっていた元アレクサンドリア総主教テオドシオスは2名の単性論派司祭を司教に叙階した。そのうちの一人ヤコボス・バラダイオスはシリア、エジプトなどを回り、各地に大勢の司祭、司教を叙階した<sup>68)</sup>。彼は当局の手から逃れるためいつも浮浪者の身なりをしていた。バラダイオスすなわち「ぼろを着た者」と呼ばれたのはそのためであった。数10年にわたる活動の結果、単性論派は自己固有の教会組織をもつようになり、調停も一層困難になってしまった。

単性論派にカルケドン信条を、ネストリオス主義とのかどで斥ける最有力の口実を提供したのは、カルケドン公会議によるテオドレトスとイバスの教会復帰であった。どちらもネストリオスの友人であったし、後者がペルシャの司教マリに送った書簡の正統性が承認されたことによって、ネストリオス主義の祖とみなされたモブスエスティアのテオドロスも正統と承認された。はじめて532年、首都でカルケドン派、単性論派各6名の代表者で開かれた会議が不調に終わったとき、ユスティニアヌスは単性論派代表に対して、カルケドン信条受理と引き換えに、この3名を弾劾する用意があることをほのめかした<sup>69)</sup>。当時、この案は実らなかったが、オリゲネス主義弾劾で痛手をこうむったパレスチナ出身修道士で、宮廷で神学顧問

を務めるテオドロス・アスキダスはユスティニアヌスの注意をオリゲネス主義から再び単性論に向けるため、テオドロス自身と全著作、テオドレトス著作中キュリロスを攻撃したもの、およびイバスの書簡、の三章を弾劾すべく措置を進言した。さらに、問題の書簡がイバスの作でなく、ゆえにカルケドン公会議の席で読まれ、正統と認められたはずもない、と説得されたところ、ユスティニアヌスは三章弾劾に踏み切った。543年あるいは翌年のことであった<sup>70)</sup>。

東方4総主教はローマ教皇の同意を条件に三章教令に署名したが、西方ではカルケドン公会議への攻撃と受け止められるのは必至だったので、教皇の同意を取り付けるのが皇帝にとっての急務であった。幸い、現職のヴィギリウスは恩義を受けている立場にあった。なぜなら536年、ローマ征服の際、皇后の計らいで教皇座に挙げられていたからである<sup>71)</sup>。そのヴィギリウスは招聘に応じてローマを去る際、当地の聖職者から署名の拒否を要請され、旅の途中にも、アフリカなど数10名の司教から同様な要請が届いた。547年1月25日、首都に到着するや三章教令に署名した者を全員排斥したが、皇后に説得されて、総主教メナスと和解し、同年6月中旬、皇帝、皇后に宛てた秘密文書で三章弾劾に同意を表明し<sup>72)</sup>、548年4月1日、メナスに送った公文書で、カルケドン信条維持を条件に、自ら三章弾劾を宣言した<sup>73)</sup>。すると西方各地の反発が教皇に集中したため、弾劾宣言を撤回した<sup>74)</sup>。同年6月28日、テオドラは亡くなった。ユスティニアヌスはその悲しみから立ち上がり、活動を再開するのに時間がかかった。

550年8月15日、ヴィギリウスは福音書に手を置き、皇帝に弾劾徹底への協力を約束することを誓ったが<sup>75)</sup>、翌年6月、皇帝が単独で問題解決を図り、長文の信仰令を公布したため、ヴィギリウスは再び板ばさみとなった。信仰令は前述した新カルケドン主義のキリスト論を述べる一方、三章がこれに矛盾するという理由で弾劾を再確認する<sup>76)</sup>。ヴィギリウスは署名を拒否したため、ついに身柄も危うくなり、同年、降誕祭の前に対岸のカルケドンに逃れ、かつてカルケドン公会議の会場であった聖エフェミア教会に

こもった。皇帝側も今度は穏健な態度に変わったので、ヴィギリウスは半年後に首都に戻り、ついに新総主教エウトゥキオスの主催でエキュメニカル公会議が開催されることに同意した<sup>77)</sup>。

### 2.3. 第2 コンスタンティノポリス公会議

公会議は553年5月3日に開会され、翌6月2日に閉会した。168名の参加者中10名程度が西方代表であった。ヴィギリウスは参加も議長職も拒否し、5月14日、教書を送り、その中でテオドロスとテオドレトスの著作から数10項目を抜粋して弾劾する一方、イバスの書簡についてはその信憑性とカルケドン公会議による正統性承認を力説する<sup>78)</sup>。しかし、ユスティニアヌスは不十分と教書の受理を拒否したため、公会議は教皇不在のまま三章弾劾を主題とする教令と、ユスティニアヌスの信仰令を基礎にキリスト論を展開する14箇条を採択した<sup>79)</sup>。ここではキリスト論に関わる箇条だけを取り上げる。

父なる神から生まれたロゴスはマリアから生まれた方であり(2条)、それゆえキリストにおいてロゴスの働きと人の働きは各々異なる主体(ヒュポスタジス)のそれらでなく、「唯一・同一の私たちの主、イエス・キリスト」の働きである(3条)。また、テオドロスが考えたように、キリストにおいて神的本性が人間の本性と結ばれたのは、神の方からの恩恵や好意と、人間の方からの誠心誠意といったゆるやかな一致ではない。「神たるロゴスと理性的、知性的靈魂に生かされる肉との結合は総合として、またはヒュポスタジスにおいて生じた(4条)。したがって、キリストのうちにロゴスのヒュポスタジスとは別の純粋人間的ヒュポスタジスはなく、まさしくロゴス自身がこの人間の主体である(5, 7-8条)。そういった意味において「乙女マリアは適切に、かつ文字通りに神の母であること」(6条)、また「三位一体の一つが受難したこと」(10条)を認めなければならない。

公会議後、ヴィギリウスはしばらく三章弾劾反対を貫いたが、550年2月20日の教書で、イバス書簡の信憑性を否定するまでも全決議への同意を表

明した<sup>80)</sup>。翌年の春ヴィギリウスは帰途シチリア島で亡くなったが、宮廷の圧力で後任に選ばれたペラギウス1世が公会議決議を承認したため、ミラノ、ラヴェンナなど西方教会主要司教から縁を切られた。分裂はようやくヨハネス3世(561-574在位)のもとに収まった。

第2コンスタンティノポリス公会議はカルケドン信条の路線に沿って、神と人との区別を再確認する一方、三位一体の第二位たるロゴスを神と人とを結合させる主体と捉えることによって、カルケドン信条の欠点を補完した。しかし、同信条からネストリオス主義の疑いを最終的に取り除くため三章弾劾に同意したことで、弾劾された故人を聖人と仰ぐペルシャ領内のキリスト教徒を切り捨てることとなった。

### 3. 教理の確立

晩年、単性論派調停失敗に失望したユスティニアヌスはエジプトで勢力を伸ばしたユリアーノス流の単性論を統一信仰にしようとも思いを巡らせていた、という情報が真実かどうかはともかくとして<sup>81)</sup>、後継者はこぞって何らかの調停を模索した。610年10月5日、帝位に就くまでカルタゴ太守を務めたヘラクレイトスの治世でこの動きが加速した。なぜなら、611年以降、メソポタミア、シリア、パレスチナ、エジプトなど各地の単性論派がペルシャの征服者をまるで解放者として歓迎したことで、彼らとの和解が最優先課題となっていたからである。

#### 3.1. 新たな論争

ヘラクレイトスが帝位についた時点で国家財政は破綻寸前の状態にあったので、すぐにもペルシャに立ち向かうことはできなかったが、イスラム教元年にあたる622年4月5日、ヘラクレイトスは反撃を開始し、630年3月21日、勝利者として「主の真実の十字架」をエルサレムに戻した。いよいよ単性論派との和解を試みる好機が訪れてきていた<sup>82)</sup>。

はじめて偽ディオニシオウスが「何か新しい神人的な働き (theandrikê energeia)」について語ったが<sup>83)</sup>、これを手がかりに、コンスタンティノポリス総主教セルギオスはヘラクレイトスの勝利でアレクサンドリア総主教座に就いたキュロスと折衝して、「一つの神人的な働き」を標語と掲げる調停案を準備した。これが633年6月3日アレクサンドリアで宣言された<sup>84)</sup>。しかし、宣言当時アレクサンドリアに滞在していたパレスチナの修道士ソフロニオスに説得されて、標語は「唯一・同一の行為者」と改定された<sup>85)</sup>。これによって、意志能力の代わりに行為主体の一致が強調される。

キリストの働きが一つか二つかという問題を棚上げにすることは、セルギオスとソフロニオスの間にできた了解の要であったが、後者が高齢にも拘わらず633年の終わりあるいは翌年初頭エルサレムの総主教に選ばれたことをきっかけに論争は拡大した。就任の際に他の総主教に書簡を送り、その中で信条を引用した上、当時の情勢に照らしてその意味を解き明かすことは11世紀までの慣行であった。教皇ホノリウスをはじめ各総主教に送った書簡でソフロニオスは、神性と人性にはそれぞれ特殊固有の属性があり、働きは属性に従うのだから、「一つの働き」について語るのは異端だ、と力説した<sup>86)</sup>。これを受けてセルギオスは教皇に書簡を送り、それまでの経過、わけてもエジプトにおける教会一致の回復を報告し、調停案の趣旨を説明した<sup>87)</sup>。返答のギリシャ訳しか残っていないが<sup>88)</sup>、その中でホノリウスは先方の賢明な努力を賞賛し、今後、キリストの働きが一つか二つか、といった余計な議論を避けるため、「一つの意志」について語るべきだ、と力説した<sup>89)</sup>。もちろん教皇は一つの意志能力でなく福音書(マタ26:42; ヨハ5:30, 39)に則って、具体的な意志行為の一致を主張しようと意図したのだろう。

632年6月8日預言者マハンマドが亡くなり、後継カリフに選ばれたアブー＝バクルは1年以内でアラビア統一を完成し、633年の秋、2万4千の兵を率いてパレスチナ南部に侵略、翌年初頭ガザ近辺で当地の駐在帝国軍を破ってから、戦いをシリアに広めた。636年の春、エデッサを拠点に各



地の防衛戦を監督していたヘラクレイトス帝は戦力をエジプトに集中するため、シリアを断念、「主の真実の十字架」をコンスタンティノポリスに送った。637年アラブ軍は再びダマスコを占領し、アンティオキアまで支配の網を張った。ソフロニオスは、638年3月11日に没する数週間前、失意のうちにエルサレムを明け渡した。

同年ヘラクレイトス帝は久しぶり首都に戻った。いまはエジプトの忠誠を保持することが緊急課題となっていた。そこでセルギオスは信仰の要を説く『解説』(Ekthesis)を作成し、皇帝名で公布する文書にシノドス(常設司教会議)の同意を取り付けた。1ヶ月後の638年12月、セルギオスが亡くなり、後任に選ばれたピュロスと同月中に新しい『解説』に対するシノドス同意を再確認した。これは一つか二つの働きについて議論することを禁じ、代わりに「一つの意志」を正統信仰の標語とした<sup>90)</sup>。ここでも抽象的な意志能力ではなく、具体的な意志行為の一致が強調されているが、用語のあいまいさでまたも論争が勃発した。

『解説』が発行される2ヶ月前ホノリウスは亡くなり、後継者に選ばれたセヴェリヌスは慣行にしたがって皇帝の公認を得るため使節を遣わし、640年5月28日に就任した。その際『解説』の受理は強制されなかった。しかし、使節の報告を通じて<sup>91)</sup>、その存在ははじめて西方で知られるようになった。新教皇はわずか2ヶ月後亡くなり、後継者に選ばれたヨハネス4世も『解説』の受理を強制されず同年12月24日に就任した。新教皇の主催で641年2月11日に教会会議が開催され、『解説』は異端と宣告された<sup>92)</sup>。ヨハネス4世は教会会議開催数週間前に亡くなったヘラクレイトス帝の後を継いだコンスタンティノス3世に書簡を送り、ホノリウスの真意を弁明すると共に『解説』の撤回を要請した<sup>93)</sup>。皇帝は撤回する用意もあったようだが、結核のため、即位3ヶ月後亡くなった。わずか10歳の弟がコンスタンス2世として帝位に就き、総主教職もピュロスからパウロスに代わった<sup>94)</sup>。即位直後、アレクサンドリア総主教への就任以来エジプト総督を兼務してきたキュロスはアラブ包囲軍の司令官アムルと停戦条約を結び、

翌 642 年の秋、アレクサンドリアを明け渡す約束と引き換えに、その期限まで包囲軍が市民の引越しや防衛軍の撤退を邪魔しないことになっていた。条約通りアレクサンドリアを手に入れた後、アムルは 644 年にリビアを征服し、その結果、食料供給地としてエジプトに次ぐ重要な属州であるアフリカも危うくなった。こうした中キリストの意志をめぐる論争は帝国社会を揺さぶり続けた。

かつて、ヘラクレイトス帝に仕え、修道者となってペルシア戦争中カルタゴに避難してきた聖証者マクシモスは当初ためらっていたが、640 年以降、きわめて勢力的に論争に加わり<sup>95)</sup>、「本性上の意志」(thelema physikon)と「行為上の意志」(thelema gnomikon)との区別を力説した<sup>96)</sup>。前者は本性に根ざす「自己決定の能力」(to autexousion)であり、それゆえキリストの場合、二つを認めなければならない。後者は各主体がその都度なす具体的な自己決定であり、これはキリストの場合にはロゴスのそれであり、それゆえ一つしかない。ホノリウスはそういった意味において正しく「一つの意志」を主張した<sup>97)</sup>。

ところで、キリストの人間の意志はただ単にロゴスの受動的な道具ではない。これを否定するならロゴスが人間となったことを否定することになる<sup>98)</sup>。人間を人間たらしめるものは何だろう。「知性的諸活動に加えて自己決定的諸活動である」<sup>99)</sup>。その活動のゆえに人間は神の似姿とも称される。

「人間が至福で超本質的三位一体の似姿としてできているのなら——そして神的本性がまさに本性上自己決定であるから——、人間はこうした本性の似姿として自らも自己決定のできるものでなければならない。」<sup>100)</sup>

だからロゴスはキリストの主体であるとはいえ、まさに人間としての自己決定のできる主体でなければならない<sup>101)</sup>。もちろん、その都度同一の主体の自己決定なので、人間としての自己決定は同時にロゴスのそれである。

そういった意味において「行為上の意志」は一つである。「救済者は人間として本性上の意志を持つ。神的意志はそれに逆らうのではなく、それを整えるのである」。<sup>102)</sup>

不幸にもマクシモスが力説した「本性上の意志」と「行為上の意志」との区別はあまり考慮されなかった。他方、マクシモス自身もその区別にこだわりすぎて、いちいち「行為上の意志」と断らずに話を進める誰をも単意論者として攻撃した。645年7月、コンスタンス2世の即位までコンスタンティノポリス総主教を務めたピュロスがカルタゴを訪れ、太守グレゴリオスや多数の司教、聖職者等を前にマクシモスと議論を交わし、討論の終わりに、教皇の前でこれまでの見解を撤回しよう、と提案した<sup>103)</sup>。同年末あるいは翌年初頭二人はローマに到着、ピュロスはピエトロ大聖堂において、自分自身と前任のセルギオオスが唱えた見解の誤りを宣言した。ラヴェンナに進んでから太守パウロスを前に宣言を撤回したが、この事件が特筆に価するのは、以来マクシモスはローマを拠点に単意論と戦うからである。その際、ソフロニオスが亡くなる寸前単意論への戦いのためローマに遣わした修道者ステファノスが強力な仲間であった。642年、おそらくその紹介でパレスチナの修道者テオドルスは教皇ヨハネス4世の後継者に選ばれた。また、急速なイスラム勢力拡張のためローマは東方出身の修道者で満ち溢れていた。

西方各地において帝政に対する不満が高まる中、646年、アフリカ駐在軍が蜂起し、太守グレゴリオスを皇帝と宣言したが、翌年アラブ軍との戦いで戦死したため、情勢が収まった。特にアフリカでの蜂起は従来の宗教政策の危険性を帝政に示したろう。他方、アルメニアでは単意論は単性論に代わる唯一の選択肢であった。そういうわけで「二つの意志」を公然と認めることもできない。648年、コンスタンス2世は『解説』の撤回を宣言する一方、キリストの意志が一つか二つかの議論を禁じる勅令(Typos)を公布した<sup>104)</sup>。もちろんマクシモス等は沈黙を守るはずもない。

649年5月14日、教皇テオドルスは亡くなり、後継者に選ばれたマル

ティヌス 1 世は、皇帝の公認なしに同年 7 月 5 日聖座に就いた。同年 10 月 5 - 31 日ラテランで教会会議が開催された。審議は専らマクシモスの言い分通りになった。すなわち、カルケドン信条の中で告白される二つの本性は、各々異なる意志能力を伴い、ゆえに「二つの意志」を認めなければならない。会議はその旨の教理を採択し、また、ヘラクレイトス帝の『解説』に加えてコンスタンス 2 世の勅令も弾劾した。さらに、亡きセルギオス、その後継者およびアレクサンドリア総主教キュロスが排斥された<sup>105)</sup>。

皇帝の反応は速やかで厳しかった。さっそくラヴェンナ太守オリュンボスに教皇の逮捕を命じたが、すでに会議開催中のローマに到着していたオリュンボスは皇帝命令執行を不可能と判断し、しばらくためらった上、イタリアにおける統治権を篡奪し教皇と折り合いをつけた。オリュンボスはシチリア島でアラブ海軍との戦いに向かう途中、腺ペストで亡くなったことで、イタリアの情勢が収まり、653 年 6 月 17 日、新しい太守テオドロス・ガリオパスは教皇を逮捕し、首都へ送った。マルティヌス 1 世は国事犯のかどで死刑判決を言い渡されたが、皇帝の恩赦で流罪に減刑され、数ヶ月後流罪先クリミア半島で没した。ほぼ同時にマクシモスも逮捕されたが、先に篡奪を図ったカルタゴ太守グレゴリオスの友人であったことが不運に働いた。手と舌を切断されて、662 年流罪先で亡くなった。こうした経緯を経て論争は次第に収まった。

655 年の夏、ウマイヤ朝のカリフ・ウスマーンへの反乱が起こり、1 年以内に反乱者はメディナを征服し、マハンマドのいとこで、その娘ファーティマをめぐらせたアリーを第 4 代のカリフに選んだ。そこで、ウマイヤ朝の出身で、シリアの総督を務める最も有能な軍人ムアーウィヤは戦いを開始したが、内乱が続く間はビザンチン帝国政府に高額の年貢をおさめた。561 年 1 月 24 日アリーは側近に暗殺され、ムアーウィヤは第 5 代のカリフに就任した。彼は直ちに首都をダマスコに移転し、ビザンチン帝国への侵略再開の準備に取りかかった。

内乱の結果、イスラムはムアーウィヤとその後継者を認めるスンニー派

とフリーに忠実なシーア派に分かれてしまった。一方、ビザンチン帝国政府は抜本的な軍事改革を実施するための余裕を得た。改革の要は軍管区（テーマ）制の導入であった。帝国軍は地域別に組織され、以前は支払いが滞りがちだった俸給は減額されたものの、その代わりに各自に応分の土地が支給された。毎年春行なわれる合同演習への参加と、各管区へ仕掛けられた攻撃を防衛するための兵役期間を除いては、各自はその土地で働くことができ、そこから主な収入を得た。こうして軍人たちの利害と国益はうまく釣り合うようになった。

コンスタンス 2 世は長男に東方での統治を任せて、西方でも権力基盤を固めようと、皇后ファウスタと三人の息子を首都に残して、引越す決意をした。662 年の春、ペレポネス半島を經由してイタリアに到着、同年の秋以降シチリア島のシラクースを拠点にして、数年前以来イタリアを脅かしていたロンバルディア人を押さえた。理由は正確にわからないが、668 年の夏、コンスタンス 2 世は浴場で侍者に暗殺された。

### 3.2. 第 3 コンスタンティノポリス公会議

若くして父の後を継いだコンスタンティノス 4 世は治世の最初 10 年間は軍事に専念し、678 年アラブ軍をアナトリアから撃退した<sup>106)</sup>。こうして、いよいよ宗教の問題に取り組む余裕ができた。単性論派優勢の地域奪回への見通しがまったく消えてしまったので、単性論派との調停の試みは、帝政にとって無意味となり、教皇側の恨みを解消することが緊急課題となっていた。

アラブ軍撃退に成功したその年、皇帝は教皇ドヌスに教理調停のため公会議を開催する意志があることを伝え、使節の派遣を要請した<sup>107)</sup>。これを受けて後任アガトは、西方各地の主要司教座に皇帝打診を検討すべく、地方教会会議開催を依頼、680 年春に会議を開いた。その席で、前回のラテラン教会会議の決議が再確認され、その旨の皇帝宛ての書簡が採択された<sup>108)</sup>。同年夏、同書簡と教皇自身の教書<sup>109)</sup> を携えた使節 3 名が首都に到

着した。これを受けて、皇帝はエキュメニカル公会議を召集し、宮廷の円天井室において自ら開会（680年1月7日）と閉会（681年9月16日）の際に議長を務めた。その間、参加者は44名から170名に上ったが、教皇使節が終始一貫して主導権を握っていた。しかし、単意論の主犯格として弾劾された故人7名に教皇ホノリオスも加わることを教皇使節も防ぐことはできなかった<sup>110)</sup>。ここではキリストの意志に関わる部分だけをまとめよう<sup>111)</sup>。

キリストの両性は、自由な自己決定機関として各々に固有の意志能力を有するが、キリストの「人間的意志は全能の神的意志に反抗したり抵抗するどころか、それに服従していた。なぜなら、その肉が神たるロゴスの肉となったように、[肉の]本性上の意志もまたロゴス自身の意志となった」<sup>112)</sup> だから、レオ教書の中で力説されているとおり、ロゴスも肉も各々固有の働きをするのだが、あくまでも唯一・同一の主体たるロゴスの働きなので、本性の働きも相互に対立せず、まったく一致する。

「この唯一・同一の主体（ヒュポスタジス）における[二つの]本性の区別は、各本性が自己固有のものをもう一方の本性とともに志し、働くことのうちに現れる。それゆえ、私たちは人類の救いのためにも働く二つの意志と働きを告白する。」<sup>113)</sup>

公会議の4年後、コンスタンティノス4世は亡くなり、またも若くして父の後を継いだユスティニアヌス2世は、公会議開催反対のため解任されたグレゴリオスを総主教座に戻し、単意論派を保護したものの、公会議決議を失効させるまでには至らなかった。711年、司令官フィリッピコス・バルダネスはクーデターを起こし、残留単意論派の勢力を読み誤って、公会議決議を失効させた。そのため、ローマなどに起きた暴動は帝位失墜を加速させた。その後、単意論派は全滅した。

結局、2代にわたる皇帝の保護、優遇にもかかわらず、単意論弁明に努

めるような神学者はもう出なかった。そういった意味においても、この公会議は長年の論争に終止符を打つことに成功した。前回の第2コンスタンティノポリス公会議が単性論派の神性重視にかなりの程度まで配慮したことは事実だが、第3コンスタンティノポリス公会議は教理の核心を再確認しながらも、キリストにおいて自由な自己決定機関として二つの意思と各々に固有の働きを区別することによって、カルケドン信条そして特にレオ教書に示される原点に戻った。しかし、治政学的状況が根本的に変わったとはいえ、単性論派とのいっさいの調停を断念したことで、イスラム圏内のキリスト教との分裂を決定的なものにしてしまった。

#### 4. 結び

4世紀後半以降、教会とローマ帝国社会を揺さぶった神学論争の大前提はキリストが「まことの神」である一方、「まことの人」でもあるという信仰であった。現代人とはちょうど対照的に、古代人にとって、前者のほうが受け入れやすかった。キリスト教が広がる前の地中海沿岸地域は万の神に満ちていたし、人を神に祭り上げることもめずらしくなかった（使14：11-13参照）。こうした風潮はキリスト教の普及に伴って直ちに消えてしまったわけではない。これに修道者の心情と一般信徒に対する修道者の影響が加わった。厳しい修行を蓄積していく中、ますますキリストに似るようになり、やがて自らも「神化」されることをめざしていた修道者にとっては「まことの人」より「まことの神」のほうが魅力的であった。こうした神性偏重に歯止めをかけるために、カルケドン公会議は、キリストの唯一の「ヒュポスタジスないしプロンボン」において神的本性と人間的本性は混合せず、分割せず、結合されている、と力説する教理を採択した。しかし両性を担う主体がただ一つ、三位一体の第二位たるロゴスだ、という正統な理解を、従来の概念構成で弁明することは容易ではなかった。そのため新カルケドン主義の名称で知られている数世代の神学者は相当な努力

を積み重ねなければならなかった。その結果、現代で自立主体と呼ばれる、かけがえのない個としての人間の存在と価値が発見された。それまで、個別的存在者は何らかの普遍的存在者の一具体例とみなされ、全体は個に、共通性は個性に優先すると考えられていた。この論究の最後にたどり着くまで、ヒュポスタジス、プロソポンを「主体」と訳さず、あえてカタカナで書いてきたのも、元来はいずれの術語も本性といった普遍の具体例を表示するものであったからである。ところで、キリストという一個人が二つの普遍、すなわち人間的の本性と神的本性を担う主体であるとすれば、従来の関係は逆転する。個性は共通性に優先する、といった関係になる。論争が終結するまであれほどの時間を要したのは、古代人はこうした大胆な思考・価値転換を遂げることをためらったからである。もちろん、キリストの主体性が論じられたのだから、これがついに三位一体の第二位たるロゴスに帰せられたことは、信仰者にとって当然の帰結であった。しかし、このキリストが「まことの人」である以上、まさに人間として自由に自己決定する能力を有するという最後の教理は、以来、信仰者の自己理解にも重要な影響を及ぼした。基本的人権宣言までの思想展開はカルケドン公会議後に獲得された新たな人間理解なしには興りえなかったろう<sup>14)</sup>。

## 註

- 1) それまでの論争の経緯およびカルケドン信条の問題点について、坂口ふみ著『個の誕生』（岩波書店・1996年）150-186頁参照。カルケドン公会議後の論争については拙論「まことの神、まことの人」『日本の神学』（第39号、2000年）20-42頁参照。ここでは、特にキリスト教内分裂という観点から、政治的背景についてより詳しい情報を提供し、また思想展開の面で、新カルケドン主義及び聖証者マクシモスの貢献を資料的に検証する。以下特筆しない場合の全略記は、S. M. SCHWERTNER, *Theologische Realenzyklopädie. Abkürzungsverzeichnis*, Berlin-New York<sup>2</sup> 1994.
- 2) *Contra Nestorianos et Eutychianos, prologus* = PG 86, 1274C-76C.
- 3) 拙論「教理史における古代キリスト論の意味」『日本の神学』（第22号・1984年）



- 225頁, 坂口上掲書 113-114, 220, 238-241, 265-266 頁参照。
- 4) 当時では, 首位司教座の占有者もただ「司教」と称せられた。カルケドン公会議の規程 28 条から法的帰結を明確にする形で, 541 年, ユスティニアヌス帝は彼らに「総主教」の称号をみとめた。その結果, 元来はただ「父」の意味であるパーバもついに「教皇」ないし「法王」という意味に変遷してきた。混乱を避けるため, ここでははじめから古典的になった称号を使う。
- 5) COD 77-82; DS 290-295. カルケドン信条はレオ教書ほど明確に「各々のかたち [=本性] に固有の働き」を強調しない。しかし神的本性と人間的本性が「融合せず, 変化せず」結合されていることは, 明らかにレオの主張を反映している。「結合によって両性の差異は消されるのではなく, むしろ各々の特性が保全される。」(DS302)。
- 6) COD 99, 27-100, 38; KonChal 2, 9-18. 459-562; A. GRILLMEIER, *Jesus der Christus im Glauben der Kirche 2/1: Das Konzil von Chalkedon (451), Rezeption und Widerspruch (451-518)*, Freiburg-BaselWien<sup>2</sup> 1991, 131-170.
- 7) 452 年 5 月 22 日, レオは皇帝マルキアーンノスと (PL 54, 995 A-B) 皇后テオドラ (999 A-1000 C) に宛てた書簡で同規程を理由に公会議決議承認を拒否, また同日総主教アナトリオスに送った書簡でその「思い上がり」やアレクサンドリアへの配慮欠如を猛烈に批判した (1001 A-1009 B)。皇帝の要請に応じて, ようやく 453 年 3 月 21 日の書簡で同規程を除いた決議承認を表明した (1027 B-1032 A)。
- 8) KonChal 2, 18-94.
- 9) 坂口上掲書 85-92, 91-92, 118-119, 121, 126-137 頁参照。
- 10) A. GRILLMEIER, *Christ in Christian Tradition 1: From the Apostolic Age to Chalcedon (AD 451)*, London-Oxford<sup>2</sup> 1975, 405-413, 526-539; *Id.*, *Jesus der Christus im Glauben der Kirche 2/1*, op. cit. 171-195.
- 11) *Ibid.* 457-463, 507-519.
- 12) *Ibid.* 478-483.
- 13) R. HESPEL, *Le Florilège Cyrillien réfuté par Sévère d'Antioche*, Louvain 1955.
- 14) 本書は損失したが, 次の注にあげる反論から知ることができる。
- 15) J. LEBON (ed.), *Severi Antiocheni orationes ad Nephaliium*, Louvain 1949; R. HESPEL (ed.), *Sévère d'Antioche: Le Philalèthe*, Louvain 1952. 以下, 概括するセヴェロスのキリスト論について, A. GRILLMEIER, *Jesus der Christus im Glauben der Kirche 2/2: Die Kirche von Konstantinopel im 6. Jahrhundert*, Freiburg-BaselWien 1989, 34-47. 156-183 参照。
- 16) *Ibid.* 24. 83-116.
- 17) イサウリ人と帝国の関係について, W. TREADGOLD, *A History of the Byzantine State and Society*, Stanford 1997, 95-96. 152-166 参照。
- 18) トリスハギオンの背景と追加の意義については A. GRILLMEIER, *Jesus der*

- Christus 2/2*, op. cit. 268-277 参照。
- 19) 修道士の役割については, KonChal 2, 193-314 参照。
  - 20) W. TREADGOLD, op. cit. 158-160.
  - 21) E. SCHWARTZ (ed.), *Codex Vaticanus gr. 1431, eine antichalkedonische Sammlung aus der Zeit Kaiser Zenons*, München 1927, 49-51, 49-51.
  - 22) Ibid. 52-54.
  - 23) 皇帝, 総主教宛ての書簡は E. SCHWARTZ, *Publizistische Sammlungen zum akakianischen Schisma*, München 1934, 63-73 に収められている。
  - 24) Ibid. 6-7 (排斥勅書)。以下については Grill 1, 279-358; F. X. MURPHY/P. SHERWOOD, *Konstantinopel II und III*, Mainz 1990, 53-65 参照
  - 25) KonChal 1, 425-580; A. GRILLMEIER, *Jesus der Christus 2/1*, op. cit. 273-279.
  - 26) KonChal 2, 285-287.
  - 27) 帝位についたとき, 帝国財政は破綻寸前であったが, ディオクレティアヌス以来, はじめて財政問題を残さなかったマルキアヌスに比べて, アナスタシオスは 3 倍もの予備費を国庫に残した。これはユスティニアヌスが推進した西方戦略の大前提となった (W. TREADGOLD, op. cit. 172)。
  - 28) Mansi 8, 441-442. 古代ローマ社会においても故人弾劾はまさに極刑で, 教会内部では, このときはじめて執行された。教会内弾劾の結果, 故人の名前はディプティコン (2 枚の折り書板) から削除される。自らレオ教書とカルケドン信条を一度も拒否したことのない歴代総主教にとってはきわめて不適切な措置であった。
  - 29) 名称自体ははじめて J. LEBON, *Le monophysisme Sévérien*, Louvain 1909 の中で用いられているが, 一般的に通用するようになったのは, 括弧内に挙げる画期的研究の影響と言えよう (M. RICHARD, "Néo-chalcédonism," MSR 3 (1946) 156-161; C. MOELLER, "Le chalcédonism et le néochalcédonism en Orient de 451 à la fin du VI<sup>e</sup> siècle," KonChal 1, 638-720)。どちらの研究も新カルケドン主義については「中途半端」「妥協主義」といった評価をほのめかすが, 最近の評価はより肯定的である。
  - 30) E. SCHWARTZ (ed.), *Drei dogmatische Schriften Justinians*, München 1937; M. AMELOTTI/L. ZINGALE, *Scritti teologici ed ecclesiastici di Giustiniano*, Milano 1977 以下, 前者を Schwartz, 後者を Amelotti-Zingale とし, 各校訂版の頁のみを記す。
  - 31) 本書はコンスタンティノポリス総主教にも渡され (CChr. SL 85A, 5-25), また, 後にはヴァンダル侵略から逃れ, シチリア島に集ったアフリカ司教団にも送られた (ibid. 157-172)。
  - 32) O. GÜNTHER (ed), *Collectio Avellana: Epistola imperatorum pontificum*, Vindebonae, 1895-1898 [=CSEL 35] 675-76. 685-687. 以下 CA とし, 各書簡の

- 番号をしるし、校訂版の頁数を括弧の中に挙げる。
- 33) スキタイ修道士案の背景、位置付けについて、A. GRILLMEIER, *Jesus der Christus 2/2*, op. cit. 334-36. 344-55 参照。
- 34) 書簡は現存しないが、推薦状であったことは教皇使節の評価から分かる (CA 217, 11 [679])。
- 35) スキタイ修道士の中にはヴィタリアヌスの親戚もいたし、ライバルの発議で彼らが上京したこと、また、その推薦でローマに赴いたことは、おそらくユスティニアヌスにとって面白くなかった。そういうわけで、教皇に送った最初の書簡では修道士自身とその提案内容をひどく批判している (CA 187 [644-645])。しかし直ぐにも見解を変えて、速達で提案支持の書簡を送り (CA 191 [648-649])、その後もますます緊迫した調子で教皇にその承認を要請した。
- 36) 520 年、エルサレムとアンティオキアに集った修道士、聖職者は皇帝に信仰告白を送り、その中で、スキタイ修道士案第 4 項をカルケドン信条の適切な解釈と推薦した。さっそくユスティニアヌスは同信仰告白を皇帝推薦状とともに教皇に送った (CA 232 [701-703])。
- 37) *Apologia concilii Chalcedonensis* = CChr. SG 1, 6-58; Gril 2, 54-74.
- 38) Ibid. IV, 3 (55: 181-188).
- 39) A. GRILLMEIER, *Jesus der Christus 2/2*, op. cit. 190-95. 286-290. 328.
- 40) *Contra Nestorianos et Eutychianos* = PG 86, 1267-1358; *Solutiones argumentorum Severi* = ibid. 1915-46. 以下頁のみを記す。A. GRILLMEIER, *Jesus der Christus 2/2*, op. cit. 196-224 参照。
- 41) 1304B-1305A.
- 42) 1920A.
- 43) 1280A.
- 44) 1945A.
- 45) Ibid.
- 46) 1277D.
- 47) P. GRAY, *The Defence of Chalcedon in the East*, Leiden 1979, 99-102; A. Grillmeier, *Jesus der Christus 2/2*, op. cit., 199 反対。
- 48) *Adversus eos qui duas affirmant Christi personae* = PG 86, 1399-1786; *Contra Monophysitas* = ibid. 1769-1900. 以下頁のみを記す。A. GRILLMEIER, *Jesus der Christus 2/2*, op. cit. 291-327. 452-455 参照。
- 49) 1485B.
- 50) 1586A-C.
- 51) 1512B.
- 52) Schwartz 74: 24-27; PG 86, 997B. ユスティニアヌスの神学的著作については、A. GRILLMEIER, *Jesus der Christus 2/2*, op. cit. 372-78. 400-402. 446-449.

- 455-59 参照。
- 53) Schwartz 86: 30-33; PG 86, 1009D-1011A.
- 54) Schwartz 72: 33; PG 86, 995C.
- 55) Schwartz 76: 29-30; PG 86, 999B-C.
- 56) CIC(B)I, 1, 5 (7-8). ユスティニアヌスの役割について, KonChal 2, 95-117 参照。
- 57) 西方遠征開始まで2年間かかった主要原因は、いわゆるニケ反乱であった。皇帝自身が首都を去ろうとするほどの危機になったが、皇后に説得されて首都に留まり、反乱を鎮めた。
- 58) CIC(B)I, 1, 6 (7-8).
- 59) CIC(B)I, 1, 8 (11).
- 60) CA 84 (326-327).
- 61) ACO IV/2, 206-210; PL 66, 20B-24A.
- 62) CA 89 (338-340).
- 63) ACO III, 111-12. 119-121
- 64) Amelotti-Zingale 43-55. 57-63; Schwartz 5-43; PG 86, 1104-46. ゾイロス宛ての書簡について A. GRILLMEIER, *Jesus der Christus 2/2*, op. cit. 379-402 参照。
- 65) Ibid. 403-421 参照。
- 66) ACO III, 189-214; Amelotti-Zingale 68-119.
- 67) コンスタンティノポリスだけでも23万人が死亡した(W. TREADGOLD, op. cit. 196-197)。
- 68) 役割については, KonChal 2, 339-360 参照。
- 69) S. BROOK, "The Conversation with the Syrian Orthodox under Justinian (532)," OCP 47 (1981) 116-117.
- 70) 東イリュリクム（バルカン半島）の司教団に対して三章弾劾を弁明する皇帝書簡（Schwartz 47- 69）は残っているが、三章弾劾令については諸断片（Amelotti-Zingale 129- 135）しか残っていない。
- 71) 出発から到着までの出来事については, FACUNDUS, *Pro defensione trium Capitulorum IV*, 3=CChr. SL 90A, 121-123 に報告がある。
- 72) 皇帝命令で同書簡は、第2コンスタンティノポリス公会議、第7総会で読み上げられた（ACO IV/1, 187-188）。
- 73) CA 83 (316-317).
- 74) Ibid. 315-316.
- 75) ACO IV/1, 16-18. 以下については, F. X. MURPHY/P. SHERWOOD, op. cit. 93-157 参照。
- 76) Schwartz 72-111; PG 86, 993-1035.
- 77) ACO IV/1, 16-18

- 78) CA 83 (230-320); DS 416-420.
- 79) ACO IV/1, 208-220; DS 421-438. 教理決議内容については, A. GRILLMEIER, *Jesus der Christus 2/2*, op. cit. 466-484 参照。
- 80) ACO IV/2, 138-168.
- 81) EVRAGIUS, *Historia Ecclesiastica IV*, 39-41 = PG 86, 2781A-85B. ユスティニアヌスと後継者の姿勢については, KonChal 2, 95-117. 179-192 参照。
- 82) ヘラクレイトスの治世について W. TREAGOLD, op. cit. 287-307 参照。
- 83) Epistola IV = PG 3, 1072 C.
- 84) 中心的個所として Mansi 11, 565 C-E 参照。以下については, F. X. MURPHY/P. SHERWOOD, op. cit. 170-202 参照。
- 85) セルギオスはソフロニオスとの了解事項を新たな信仰解説にまとめ, シノドス(常設司教会議)の承認を得てキュロスに送った (Mansi 11, 533C-536A)。
- 86) Mansi 11, 481E.
- 87) Mansi 11, 529A-538B. この中でセルギオスは調停案の発議をもっぱら皇帝に帰し, またその先駆として, メーナスがヴィギリウスに渡した, とされた小冊子を引用した。聖証者マクシモもこの小冊子に言及したが, 現存していない (PG 91 332B-C; Mansi 10, 741E-744A)。第3コンスタンティノポリス公会議の席でローマの使節が力説したとおり, おそらく問題の小冊子は当時にできた偽作であった (Mansi 11, 225B)。
- 88) Mansi 11, 538C-544C.
- 89) Mansi 11, 540B 参照。
- 90) Mansi 10, 992B-997A.
- 91) Mansi 10, 677A-678D.
- 92) Mansi 10, 679B-680D.
- 93) Mansi 10, 682E-686E.
- 94) コンスタンス 2 世の治世について W. TREAGOLD, op. cit. 307-322 参照。
- 95) *Opuscula theologica et polemica* = PG 91, 45B-56D. 64D-65A. 114D-132D. 184C-212A. 227A-245D. 268A-273D; *Disputatio cum Pyrrho* = PG 91, 288A-353B.
- 96) PG 91, 53C. 56B. 185D-188C.
- 97) ホノリウス弁解については特に PG 91, 237D-244B 参照。
- 98) 「人間本性上の諸行為がなければ, 人間ではない。他の本性でも, 自己固有のもの, 自己をそのようにせしめるものがなければ, 実際に本性ではないように」(PG 91, 200C)。
- 99) PG 91, 301C.
- 100) PG 91, 304C. 同様に 324C-D.
- 101) 「わたしたちと同じ本質とはたらき, または, 人間本性による同じ生得の意志を持つ」(PG 91, 210C)。

- 102) PG 91, 48D.
- 103) PG 91, 352D-353A.
- 104) Mansi 10, 1029C-32B.
- 105) Mansi 10, 1149D-E. 1150D-E; DS 500-522. これについては, F. X. MURPHY/  
P. SHERWOOD, *op. cit.* 221-229 参照。
- 106) コンスタンティーン 4 世の治世について W. TREAGOLD, *op. cit.* 323-330 参  
照。
- 107) Mansi 11, 19B-202B. これについては, F. X. MURPHY/P. SHERWOOD, *op.*  
*cit.* 230-266 参照。
- 108) Mansi 11, 286B-315D; DS 546-548.
- 109) Mansi 11, 233A-258A; DS 542-545.
- 110) COD 124-130; DS 550-552. 教理決議内容については, F. X. MURPHY/P.  
SHERWOOD, *op. cit.* 267-291 参照。
- 111) DS 553-559.
- 112) DS 556.
- 113) DS 558.
- 114) 拙論「人間の尊厳——ルネサンスの貢献」『南山神学』(第 23 号・1999 年)259-296  
頁参照。

## Discovery of the Autonomous Subject

### A Legacy of Early Christianity

Hans-Jürgen Marx

The key formula of the Chalcedonian Creed is *the same truly God and truly man*. It expresses concisely the presupposition of all participants in the discussions concerning the person and nature of Christ, common at the latest since the second half of the fourth century. However, by stressing Christ's hypostatic union with the Divine Logos, the Alexandrian School clearly put greater emphasis on the first part of the formula. The Antiochian School reacted by stressing the distinction between Christ's human and divine nature. However, by doing so it failed to adequately explain the unity of Christ as *one and the same Son of God*, another key formula of the Chalcedonian Creed.

The Council of Chalcedon (451) tried to safeguard the legitimate concerns of each school by acknowledging the distinction between Christ's human and divine nature, on the one hand, and defining on the other hand, that both natures come together into a single *hypostasis* and a single *prosopon*. The clarification of this definition, leading to the final formulation of orthodox doctrine took two and a half centuries. In addition to establishing orthodox doctrine the discussions during this period led to the discovery of the individual person as an autonomous subject. However, the price was the first division of Christianity into the Chalcedonian main stream and its opposites, commonly distinguished as the Nestorian and Monophysite churches. Also the seeds for

the schism between the churches of the West and the East were sown during this period.

This paper draws attention to the political and economical interests involved in the various stages of doctrinal clarification. Concerning the latter, much space is devoted to the contribution of the main theologians, belonging to the Neo-Chalcedonian School, and to the contribution of Maximos Confessor. It was especially the latter's insistence on Christ's self-determination as a human being that finally led to the establishment of orthodox doctrine.